

「見つけよう みんながもっている いいところ」

これは、児童福祉週間（5月5日～11日）の標語でした。沖縄県に住む11歳の男子小学生が作ったものだそうです。5月8日の朝会で、この標語を全校児童に紹介し、この中にどんな願いが込められているかを考えてみました。1年生から6年生までの児童から一人ずつ自分の意見を発表してもらいましたが、それぞれがとてもよいものでした。

5月5日の読売新聞の社説の中の印象に残った文章を以下に紹介させていただきます。

いじめる側は他人の短所を探し、おとしめて満足する。しかし、学校は、どの子どもも必ず持っている長所や才能を発見し、磨き、伸ばす所だ。先生はそう教えてほしい。児童福祉週間の標語は、教育が立ち返るべき原点でもあろう。

親も、子どもの「いいところ」を見つけて、本人に気づかせてほしい。

ところが、気がかりな数字がいくつもある。読売新聞が中学生に「親から言われてうれしかった言葉は」と尋ねた調査で、「特にない」「忘れた」などの答えが5割もあった。

一方、小中学生の親に対する内閣府の調査では、子の悩みや心配事を「知らない」という答えが、母親で34%、父親で67%に上った。父親の4人に1人が「平日は子どもと接触がない」という。

子どもが持っている長所や才能を発見し、磨き、伸ばすことは桐光学園小学校においても大切にしていることの一つです。しかし、同時に子どもが友だちや他の保護者から受け入れてもらいにくい面を持っていることがあるということにも私たちは毎日の仕事の中で直面することがあります。子どもが持っている様々な力（長所も短所も含めて）と向き合い、適切な声かけや指導をすることは当然ですが、私たちは一人ひとりの子どもをできるだけいくつかの角度から見ようとしなければなりません。そうすることによって、短所と思われることであっても、その子の長所に見えてくることもあります。ほめるところがない子など一人もいません。子どもが先生や家族からのアドバイスや注意を素直に聞き入れることができる背景には、子どもの気持ちの中に「自分は先生や家族に愛されている」というものがなければなりません。

「先生や家族から言われてうれしかった言葉は？」と聞かれたときに、みんながいくつかの言葉を思い浮かべることができるようにしていきたいものです。

さて、まわりの人のいいところを見つけるのと同じように大事なことに「自分のいいところに気付く」ということがあります。子どもたちに「あなたのいいところは？」と聞けば、必ずいくつか思い浮かぶだろうと思うのですが、それが学年が上がるにつれて少なくなっていくことがあります。自分にいいところがたくさんあると思えている段階では、毎日の生活も自信に溢れていて、何をすることも生き生きとしています。ところが、「できて当たり前」「むしろできないことが問題」と言われることが多くなると、逆に自分に自信が持てなくなってしまい、ついには「自分はだめな子」というように自己否定の気持ちばかりが強くなってしまいます。

実際「自分のいいところ」がたくさんあることを知っていても、一つか二つのできないことがあることで、自信を持った生活ができなくなっている子どもがいるのではないのでしょうか。親も教師も、「こういう子どもになってほしい」という願いを持って子どもに接しているはずですし、子どもにもそれがきちんと伝わるようにすることは大切だと思います。そうすると子どもはその期待（願い）に応えようと努力します。そのときに、私たちは結果だけで評価してはいけいではないのでしょうか。子どもがあることがらに対してどれだけ努力できたかを認めてあげることが、子どもに自信を持たせることにつながるのだと考えます。

自信過剰なものも問題ですが、それはたくさんの経験をし、自分を知ることによってほどほどのところに落ち着いていきます。むしろ問題なのは、適切な評価をしてもらうことができないことからくる自信喪失ではないのでしょうか。

【疲れた・・・】

最近、子どもたちが「疲れた」と言うことが多くないですか？ 子どもは少々のことでは疲れぬいものだとと思っているのですが、ときどき私の考えが間違っているのではないかと思うことがあります。

しかし、「疲れた」と言っていた子が次の瞬間また元気に活動している姿を見かけることも多いのです。そんなとき、あの子の「疲れた」の一言は、本当だったのかな？それとも単なる口癖だったのかな？と考えさせられます。「疲れた」と言う背景には、そばにいる人に自分の方を向いてほしいという気持ちがあるのかもしれない。そういう意味では子どもたちが発する「疲れた」の一言は理解できなくはありません。

グループ討論会のお知らせ（参加希望者はメール、電話、連絡帳などでご連絡ください。）

6月5日（火） 10：30～12：00 テーマ「子どもが自信を失わないようにする声かけ」